

大学博物館の展示解説における語りの分析： パネル・キャプションに何を補完しているのか

An analysis of the narrative in the exhibition commentary at the University Museum: What is Complements the Panels and Captions?

元木 環[†], 塩瀬 隆之[‡]

Tamaki Motoki, Takayuki Shiose

[†] 公立はこだて未来大学, [‡] 京都大学総合博物館

Future University Hakodate, Kyoto University Museum

mtktmk@fun.ac.jp

概要

本研究は、筆者らが自ら監修する大学博物館の企画展示においてキャプション解説と対人解説を行った場合、観覧者の反応が異なることに着目した。あらかじめ用意した展示解説と会期中に発信したSNSによる対人的な解説の内容と構成を比較考察したところ、SNSによる解説では、展示監修を通じて得られた気づきや意義、個人的関心が補完されていた。

キーワード：博物館(Museum), 展示解説, narrative

1. はじめに

近年、博物館における展示デザインには「ある意図に基づき伝えたい事柄をわかりやすく提示すること」(木村, 2010) が求められており、展示空間には原資料を補足するパネルやキャプションといった何らかの解説があわせて提示されている。それぞれの博物館の扱っている資料の分野や設置目的、あるいは担当学芸員の意図によって、展示解説に何をどの程度提示するのか、印刷物を掲示するのか、配布するのか、音声ガイドなどの解説装置で再生するのか、対人で解説を行うのかなど、表現方法や伝達手段においてさまざまに選択されている(吉村・関口, 2015)。

第二著者が所属するような大学博物館においては、守重(2007)によると「特に専門的な資料が多く、専門的知識の無い一般の見学者にとっては、資料だけでその価値を理解することは困難である。積極的に学外に情報を発信しなければならないとすれば、(中略)たとえば、一般の見学者向けのわかりやすい解説文の添付が不可欠となり、学術資料などを非専門家でも理解可能なように展示する配慮が望まれる。」とされ、筆者らが展示を企画実施する場合にも、企画意図や資料解説などをどのようにかたちにするか、観覧者への伝達媒体や伝達機会のデザインにも注力し、創意工夫を凝らしてきた。

2. 研究背景と目的

これまで筆者らは、自身らの企画展において展示空間に設置するパネルやキャプション、ハンドアウトなど各種解説を執筆、デザインをしているにも関わらず、ギャラリートツアーなどの対人による解説(以降、会場設置以外の展示解説を「対人解説」と呼ぶ)を行うと、観覧者より「パネルやキャプションを読んでいるだけよりもよく理解できた」「(説明なしでみるよりも)面白かった」といったコメントが寄せられ、所属博物館内からも常設以外の展示を行う場合には、企画者による対人解説の実施が期待されていることを知っていた。

筆者らは、自身らがパネルやキャプションを執筆しているにも関わらず、対人解説にはその内容とは異なる内容が追加されていると意識しており、話すことでより展示の意図が伝わっているという観覧者の反応も感じていたが、そのあいだにどのような差異があるのかは明らかにしてこなかった。

また、対人解説は第二著者による属人的な活動に頼ることが多く、第一著者が展示に関するほとんどの情報を共有理解していても、急遽第二著者の代理で対人解説を務めることになった場合に、「膨大な展示とその情報の中から、何をどう解説すべきか」に戸惑いを感じたことがある。その場は特に問題なく数回実施したが、基本的に一方向に情報を伝達する形式であるにも関わらず、自分自身で「何をどう解説するか」はその場に応じて組み立てていること、実施回によって内容や情報提示の順序にもばらつきがあることを認識していた。

博物館展示を観覧する際、対人解説が観覧者の観覧体験の満足度を向上させるのであれば、可能な限り多くの観覧者に提供できることが望まれるため、対応できる人材を増やす、あるいはギャラリートツアーといった実空間での対人解説ではないが必要な要素を含む別の

方策を検討するためにも、対人解説の実践で何が行われているかを捉えることが必要だろう。

本研究では、筆者らが展示解説において、どのような情報を補完しようとしていたのか、解説を補完する語りには何らかの構造があるのかを探索的に検討する。

3. 対象とする展示と解説

本研究では、2022年10月5日から12月4日にかけて京都大学総合博物館企画展示室において開催された2022年度特別展「創造と越境の125年」(以降、「本展」と呼ぶ)を対象とし、本展の企画監修者である第一著者と第二著者があらかじめ執筆したパネルとキャプションによる展示解説と、口頭や口頭による伝達を意識したSNSによる対人解説を比較する。

展示概要

この展覧会は京都大学創立125周年記念事業のひとつとして計画され、大学が1897年に日本で2番目の帝国大学として創立された経緯と建学以来「変わらずに守り続けてきたこと」と「変わり続けてきたこと」に焦点をあて125年の歴史を振り返るものである¹⁾。この展覧会には「京都大学らしさとは何か」を展示によって大学構成員自らが探索し、提示する意図があり、構成員以外の観覧者にも「大学とは何か」を考える契機として働くことを期待している。企画の内容は、第二著者と第一著者が総合監修者として展示するすべての資料を選出し、展示室内に設置したすべてのパネルとキャプションの解説文を共同で執筆した。

展示室は全体の導入部分と5つのゾーンに分けられる。実物資料は33の展示ケースと展示台に、また映像資料は3モニターと2スクリーンに展示している。展示空間には「原点」「歴史」「創造」「越境」の4つのゾーンにそれぞれ象徴する標語のバナーが、「創造」と「越境」はそれぞれに属する展示資料の注目ポイントのヒントが漫画イラストで描かれている仮設壁面が設置され、展示空間の構造および展示意図との関連を示している。

あらかじめ執筆したテキストによる展示解説

本研究で基本とする展示解説は、29のパネルと55の

キャプション、来館者が手に取り持って帰ることができる配布用ハンドアウトである。パネルには、直接的な実物資料が存在しない大学の概要や活動情報、沿革といった内容がテキストと写真、図解によって解説されている。キャプションには、実物資料と映像資料の名称や基本情報、来歴や本展示に選出した意図と関連する事象について150から288文字以内で解説している。ハンドアウトには、キャプションに掲載したテキストを全て掲載している。なお、資料1つに1つのキャプションが設置される場合と、複数の資料群をまとめた展示ケースに対して1つ設置する場合があるため、解説に含めた情報量はまちまちである。

口頭や口語調で発信した対人解説

本研究で比較対象となる対人解説のデータは次の3種である。

・ギャラリーツアー展示解説の発話および再現動画

第二著者がギャラリーツアーで解説している発話記録、および同等の内容をカメラに向かって再現した動画がある。このうち再現動画については大学のYouTubeチャンネルで公開され、現在も記録として視聴することができる²⁾。

・SNS投稿における解説：

会場内の対人解説ではないが、第二著者が展示期間直前の2022年10月2日から展示期間終了後の2022年12月22日まで、自身のSNS個人アカウントで53回の投稿をおこなった解説文がある。所属元の博物館公式の見解ではないが、第二著者が企画監修者であることはユーザーに周知されている。全ての投稿は、タイトル、言及する内容に応じた会場写真、読み原稿に近い口語調のテキストで構成されている。

4. 分析

本発表では、キャプションのテキストによる展示解説に対してSNS投稿による対人解説を比較対象とし、その内容と構成について考察する。

最初にキャプションテキストの内容を分類する。キャプションのテキストは図1のようなまとまりとして文字組みがされており、どのキャプションもおおよそ同じ、4種の項目で構成されている。

1) 京都大学総合博物館企画展・特別展
<https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/special/20221005/>
 2) 京都大学 YouTube チャンネル 総合博物館「創造と越境

の125年」展示解説
<https://www.youtube.com/watch?v=tLVSJu-4dkI>

- タイトル（資料名または資料群名）
- 出自等（資料年代および所蔵や提供組織名）
- 解説文
- 参考文献および関連資料情報，リンク

このうち解説文は次のような内容で構成されている。

ア) 資料名や出自情報についての説明

イ) 資料の素材，形状や表示文字記号など，実際に見える特徴の説明

ウ) 資料が収集，作成された経緯もしくは用途説明

エ) 資料の背景にあるエピソード，または社会的，学術上の意義

エ) の内容は，今回の展示に選出した理由とそれを理解する前提知識としてア) イ) ウ) が書かれている。

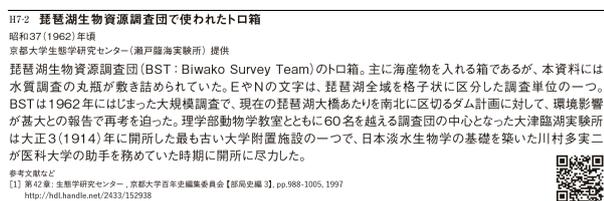


図1 キャプション例

SNS 投稿との比較

つぎに SNS 投稿のテキスト内容を分類し，比較する。まず，SNS 投稿の投稿内容はつぎの 3 つの項目で構成されている。

- タイトル
- 解説文
- 該当する資料，または会場写真

図2は図1と同じ資料について解説した SNS 投稿の解説テキストである。タイトルは「第一弾は BTS !... と見せかけて BST !」とされている。その他の投稿例では「10月10日はノーベル経済学賞の発表、ということで今日のご紹介は、経済学！」「2022年10月14日は鉄道開通150年記念ということで、蒸気機関車模型をセレクト。」などがある。同じ資料のキャプション解説である図1のタイトルは単なる資料名の列挙になっているところ，SNS 投稿では時事や解説するタイミングに絡めている。

解説文では，キャプション解説のア) イ) ウ) とは同様の内容が説明されており (A, B, C2), エ) のような背景エピソードはキャプションで1つ説明しているところ，SNS 投稿では3つ (C1, C3, C4) を説明しており数が増えている。その他の投稿においても背景エピソードの増加が見られるほか，展示準備や展示会場で偶発的に起きた出来事や出会った人に展示とのセレン

ディピティを見出せることを伝えるような内容など，展示の企画意図や展示を通じて監修者がえられた意義がより明示的に述べられていることが共通する。

SNS 投稿のテキストの構成

また，SNS 投稿のテキストは，次のような順に構成されているがみられた。

(A) 呼びかけ (つかみ)

(B) 資料概要・出自と見るべき範囲を注意

(C) 資料の背景やそこから派生したエピソード

(D) 読者への呼びかけまたは自分と資料の関係

最初にタイトル (A) と (B) の書き出しで時事や投稿タイミングに合わせた資料解説であること，あるいは質問を宣言し，以降の解説へ興味をつなぐ橋渡しとなる内容を述べている。

次に (B) で資料やパネルなど，掲載している資料 (写真) の注視してほしい範囲を具体的に述べ，視線を誘導している。(B) では，観覧者が展示会場で資料を前に，どこに視点を持っていくか，そしてそこから情報を把握し，また次の視点へと進むことを支援することと同様に，視点の移動と理解を時間軸を持って支援していることが考えられる。

つづいて (C) で誘導した範囲の表層に関連するエピソードが述べられる。(C) は投稿の中心部分でエピソードを多重に説明しているのは，「なぜこの展示で出品したのか」「この資料がなぜ“創造”“越境”として展示されているのか」という問いに対する理由でその部分が，展示で表現したいと考えていた「京都大学らしさとは何か」という問いに対して，監修者らが展示準備において得られた答えの数々であり，資料そのものの解説だけでは提示しきれなかった内容を解説として補完していることが考えられる。エピソードを起点に直接資料からは離れるが，関連したエピソード，人物や活動の紹介などが多重に続いている場合がある。

投稿の最後 (D) には，読み手への呼びかけ (例えば「薄片技術者のその技をご堪能くださって、ぜひ口に出して叫んでください。「薄!!」など」や，自分自身と解説した資料やエピソードとの関係を示す語り (例えば「漢文読んだの、センター試験以来やで...」など) がみられる。この部分は必ずしも展示や資料の意図とは直接的に関係がないこともあるが，(C) 派生するエピソードの中から観覧者の記憶に残したい要素を連想させる働きや投稿自体の読後感を軽快にすることで実際に見たいと思わせる働きを担っている。

タイトル【第一弾はBTS!... と見せかけてBST!】

- A □ Biwako Survey Team の略。琵琶湖生物資源調査団のトロボ箱です。
- B □ トロボ箱というのは、海産物を入れる箱なんですけど、底をよく見てください。丸い跡が残っています。これ、水質調査の丸跡が敷き詰められていたっばい。フタについているNの文字は、琵琶湖を格子状に区分したN4とかN7とか、そのエリアごとの水質を調べるのに使います。
- C1 □ とき遡ると60年前の1962年、琵琶湖にダム計画があったそうです。現在の琵琶湖大橋あたりを南北に区切るダム計画に対して、どれほどの環境影響がでたのか60名を超える大調査団をリードした大津臨湖実験所の資料です。
- C2 □ トロボ箱にもいい感じのフォントの略字で「京大臨湖」とありますが、大津臨湖実験所は大正3(1914)年に開所した最も古い大学附属施設の一つで、日本淡水生物学の基礎を築いた川村多実二が開所に尽力した施設です。
- C3 □ 淡水生物への大衆の興味を引き起こそうと、川村先生は早くも大正4(1915)年第一回臨湖実習会で全国の中等学校教員を集めます。100年以上も前にアウトリーチ、サイエンスコミュニケーション活動の原点がすでに琵琶湖畔にあったそうなのですが、
- C4 □ それだけにとどまらず、こういった場で川村先生の薫陶を受けたとある先生のお孫さんが、実は後に大津臨湖実験所の流れをくむ京都大学生態学センターに研究者として着任しておられたという
- C5 □ いや川村先生の後進を育てる魂、ほんまにつながってるやんっていうような物語が一つの展示品に隠れていますので、一つ一つの資料の向こう側にいる何十、何百の人を想像し、50年100年を想像しながら展示をみてもらいたいです。
- D □ そんな資料が100点もあつたら、そりゃもうお腹いっぱい。(このペースで書いていくのか?大丈夫か? いやそんなあほな

図2 SNS投稿された解説テキスト例

5. 考察

キャプション解説は、ひとつひとつの資料の概要的な情報や資料を展示に選出している意図につながるエピソードを客観的に記述していることと比べ、SNS投稿による解説は、資料選出の意図を伝える場合に、展示を通じて監修者がえられた意義がより明示的に述べられ、同時に監修者自身の気づきや資料との関係、関心が補完されている。これは観覧者がより資料と展示意図との関連を見出せる契機を補完しているとも考えられる。

また、展示空間における順路とは異なる順序で解説が行われており、展示全体の企画意図に沿って空間に提示された体系とは別の体系でも展示を捉えられることが示されているとも考えられる。

6. 今後の展開

今後は対面で行われた対人解説の発話についても分析を行い内容分類と構造を見出したい。

文献

- [1] 日本展示学会編著 (2010) 『展示論—博物館の展示をつくる』 雄山閣。
- [2] 吉村浩一, 関口洋美 (2015) “美術館と博物館の展示解説が相互に学ぶこと：展示専門家へのインタビューに基づく展望” 法政大学文学部紀要, vol.71, pp.91-112, 法政大学文学部。
- [3] 守重信郎 (2007) “わが国の大学博物館の問題点とその背景”, 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, No.8, pp.209-219.
- [4] 塩瀬隆之, 元木環 (2023) 『京都大学創立125周年記念事業／京都大学総合博物館2022年度特別展「創造と越境の

125年」展示記録』京都大学総合博物館発行。
[5] 黒沢浩編著 (2014) 『博物館展示論』講談社。